

白光

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

陳士成ちんしせいが県の試験の発表を見て、家へ帰つて来た時にはもう午後であつた。彼は行つた時には手ツ取早く揭示板を見て、まず上段の陳字を捜した。陳字も少くはないが、皆先きを争い、遅るるを恐れるように彼の眼の中に躍り上つて来た。しかしそれに繋がつてゐるのは士成の二字ではなかつた。彼は新規巻きなおしにもう一度十二枚の揭示の円図の中を一つ一つ捜し尋ねて人名を皆見尽したが、遂に陳士成の名を見出すことが出来なかつた。彼はただ試験場の壁の前に突立つていた。

涼風すずかぜはそよそよと彼の白髪交りの短い髪の毛を吹き散らしたが、初冬の太陽はかえつて暖かあたたに彼を照し、日に晒された彼は眩暈を感じて、顔色は灰色に成り変り、過労のため赤く腫れ上つた二つの眼の中から奇妙な閃光が飛び出した。この時は、実はもう壁の上の揭示などは眼の中にない。ただたくさんの真黒な〇〇がふらふらと眼の前に浮び出しているのだ。

ずば抜けた秀才として初等試験から高等試験まで立続けに及第し……村の物持はあらゆる手段をもつて縁を繋ぎ求め、人々は皆神かみほとけ 仏ぼつのように畏敬し、深く前の軽薄を悔いて気を失うばかり……自分の檻樓屋敷ぼろの門内を賃借りする雑姓を追い出し——追い出すどこ

るか、なかなかどうして彼等自身で運び出す——家屋は面目を一新して門口には旗竿と扁額……位が欲しければ京官けいかんとなるもよし、金が欲しければ地方官となるがいい。……彼は常日頃割り当てていた行先が、この時潮うしおをうけたキンカ糖の塔のように、ガラリと崩れて、ただうず高き破片のみが余っていた。彼は藻抜きの殻をぐるりと廻して知らず知らず家路つに著いた。

彼はようやく自分の家の門口に著いた。七人の生徒は一斉に口を開けてがやがやと本を読み始めた。彼はびつくりして、耳の側で鐘を叩かれたように感じた。見ると七人の頭が小さな辮子べんすを引いて眼の前に浮び上った。部屋中に浮び上って黒い輪に挟まれながら跳おどり出した。彼は椅子に腰おろを卸してよく見ると、彼等は夜学に來ているのだが、彼の顔色を窺うようにも見えた。

「帰つてもいい」

彼はようやくのこと、これだけのことを悲しげに言った。

子供等はぞんざいに本を包んで小腋こわきに抱え、砂煙を揚げて馳かけ出して行つた。

陳士成はまだいろいろの小さな頭が黒い輪に挟まれて眼の前に踊り出すのを見た。それが、時には交ぜこぜになり、時にはまた異様な陣しん立だてに排列され、遂にだんだん減少して

ぼんやりとして来た。

「今度もこれでお終い」

彼はびつくりして跳び上った。明らかに耳の側そばで話しているのである。振返ってみると人がいるわけではない。まるでボーンと一つ、鐘を叩くようにも聞えたので、自分の口でもいいなおしてみた。

「今度もこれでお終い」

彼はたちまち片方の手を上げて指折数えて考えてみると、十一、十三回、今年も入れて十六回だ、とうとう文章のわかる試験官が一人も無かった。眼があつても節穴同然、気の毒なこつた、と思わずクスクスと噴き出したが、また憤然としてたちまち本の包つつみの中から正しく書き写した制芸文と試験用紙を脱ぬき出し、それを持って外へ出た。家の門まで出ると凡すべてがハッキリ見え出し、一群の鶏も彼を笑っているので度肝を抜かれて引込んだ。

彼は部屋に入つて席に著くと、二つの眼が異常に光った。彼の眼はいろいろのものをしながらはなはだ攫つかみどころのない。キンカ糖の塔のように崩れた行先が眼の前に横たわつた。この行先はひたすら広大にのみなりゆきて、彼の一切の路みちを堰せき止めた。

よその家の煮焚きの烟けむりは、ずっと前に消え尽して、箸もお碗わんも洗つてしまつたが、陳士

成はまだ飯も作らない。ここの長屋を借りて住む趙錢李孫（源平藤橘）は長いしきたりを知っていて、およそ県試験の年頭に当り、成績が発表されたあとで、このような彼の眼付を見ると、そうそう々門を締めて、余計なことに関係せぬに越したことはないから、真先きに人声が絶え、続いて次から次へと燈火を消してしまふので、冴え渡った月が独りゆるゆると寒夜の空に出現した。

青い空は一つの海のような工合で、そこにいささか見える浮雲は、さながら筆洗ひっせんの中で白筆はくひつを洗ったように棚曳たなひき、冴え渡った月は陳士成に向つて冷やかな波を灌そそぎかけ、初めはただ新あらたに磨いた一面の鉄鏡に過ぎなかつたが、この鏡はかえつて正体の知れぬ陳士成の全身を透きとおして、彼の身体の上に鉄の月げつめい明を映じた。

彼は室外の院子あきちの中をさまよつていたが、眼の裡うちがすこぶるハッキリしてあたりは静まり返つていた。静まり返つた中にわけもなくいきこぎが起つて来て、彼の耳許にしっかりとした、せわしない小声が聞えた。

「右へ廻れ、左へ廻れ」

彼は伸び上つて耳を傾けるとその声はだんだん高くなつて

「右へ廻れ」

と言った。

彼は覚えていた。この庭は彼の家がまだこれほど落ち目にならぬ時、夏になると彼の祖母と共に毎晩ここへ出て涼んだ。その時彼は十歳にもならぬ脾弱ひよわな子供で、竹榻たけいすの上に横たわり、祖母は榻いすの側そばに坐していろんな面白い昔話をしてくれた。祖母は彼女の祖母から聴いた話をした。陳氏の先祖は大金持だよ。この部屋は先祖がお釜を起したところで、無数の銀が埋うづめてあるそうだから、子孫の中で福分のある者がそれを掘り当てるのだろうか、まだ一向出て来ない。埋うづめてあるところは一つの謎の中に蔵かくされてある。

「右へ廻れ、左へ廻れ、前へ行け、後ろへ行け、柵ますめ目構はかわず量はかれ金銀」

この謎について陳士成はつねづね心に掛けて推測していたが、惜しいかな、ようやく解きほごしたかと思うと、すぐにまたはぐれてしまう。一度彼はたしかに見当つけて、唐家に貸してある家の下に違いない、と睨にらんだが、向うへ行つて掘り出す勇氣はない。幾度も考えなおすうちにだんだんそうらしくなつて来た。自分の部屋の中にいくつも掘り返した穴あなの痕あとは、前かた試験に落第してその都度腹を立てた挙動の跡で、のちのちそれを見ると羞はづかしくなつて、人に合せる顔もないように思われた。

しかし今夜は鉄の光が陳士成を閉じ籠めて、あのねと勧めた。彼が愚図おろついていると、

正しき証明を与え、そのうえしんみりした催促が加わるので、どうしても自分の部屋の中へ眼をやらすにはいられない。

白光！ それは一本の団扇うちわのようにひらひらと彼の部屋の中に閃いた。

「とうとうここにあつた」

彼は素晴らしいながら獅子のように馳け出して部屋の中に飛び込んだ。飛び込んだ時にはもう白い光の影もなく、ただ薄暗い元の部屋に壊れかかった数ある卓子テーブルがみな黒暗くらやみの中に隠れていた。彼は爽やかな気分になつて突立ち、もう一度ゆるゆる瞳を定めてみると、白い光はハッキリと見え出して来た。今度はいつそう広大に硫黄の火よりもハッキリとして白く、朝霧よりもほんのりとして濃こまやかに、東の壁の書卓の下から立上つた。

陳士成は獅子のように馳け出して、門の後ろに行つて、手を伸ばして鋤すきを探り出すと、一すじの黒い影にぶつかった。彼はなぜかしらんが少しこわくなって、慌てて燈火をつけてみると、別に不思議はない。やはり鋤が寄せかけてあるのだ。彼は卓子テーブルを片寄せて、鋤を振上げて四つの大タイルを一気に掘り起し、身を僂かがめてみると、いつものように黄いろい砂があつた。袖をまくし上げて砂を掻き起すと、下から黒い土が出て来た。彼は極めて用心深く一鋤ひとすきひとすき々々、掘り下げて行つたが、深夜のことではあるし、鉄の尖さきに土の当

る音は、とにかく重々しく、隠しおおせる響ひびきではない。

坑あなの深さが二尺余りに達したが、甕の口が出て来ない。陳士成はいらいらして力任せに掘り下げると、コツンと一つひび破れる音がしてすこぶるひどく手にこたえ、鋤の尖に何か固いものがぶつかつた。そこで慌てて鋤を投げ出し、探ってみると一つの大タイルが下にあつた。彼は顫ふるえながら一生懸命にそのタイルを掘り起し、前と同様の黒土をたくさん掻きわけてみたが、やはり際限なく感ずるうち、たちまち小さな硬いものに触れた。丸いもの！ おおかた一つの鏽さびだらけの銭！ その外瀬ほか戸物のカケラが二つ三つ出て来た。

陳士成は汗みずくになつて掻き分けたが、心が上の空になつてガタガタ顫えていると、また一つ奇妙なものにぶつかつた。それは馬の掌てのひらに似たようなもので手にさわるとはなはだ脆い。彼は用心深く撮つまみ上げ、燈光の下でよく見ると、斑まだに剥ただげ爛ただれた下顎の骨で、上には不揃いに欠け落ちた歯が一行に並んでいる。この下顎の骨は握つかっているうちにむくむくと跳ね返り、遂にげらげら笑い出して口をきいた。

「今度もこれでお終しまい」

彼はひやりとして手を放した。下顎の骨はふらふらと坑の底へ帰つてゆくと同時に彼は中庭に逃げ出した。彼は偷ぬすみ眼して部屋の中を覗くと、燈光はさながら輝き、下顎の骨は

さながら冷笑あざわらっている。これは只事ただごとでないからもう一度向うを見る気にもなれない。彼は少し離れた簷のきした下に身を躲かくしてようやく落ち著きを得たが、この落ち著きの中にたちまちひそひそとささやく声が聞えた。

「ここではない。……山の中へ行け」

陳士成はかつて白昼、街の中でこれと同じ人声を聴いたことを想い出し、彼はもう一度聞かぬ先きに、おおそうだと悟った。彼は突然仰向いて空を見ると、月はすでに西高峯せいこうほうの方面に隠れ去った。町を去る三十五里の西高峯は眼の前にあり、笏しやくを執る朝臣ちようしんの如く真黒に頑張つて、その周囲にギラギラとした白光は途方もなく拡がっていた。しかもこの白光は遠くの方ではあるが、まさに前面にあつた。

「そうだ。あの山に行こう」

彼はこう決して打ちしおれて出て行つた。幾度も門を開け閉あてする音がしたあとで、門の中はひっそりとしてそよとの声もない。燈火は一しきり明るくなって空部屋あきべやと洞空ほらあなを照したが、パチパチと幾声いくこえか破裂したあとで、だんだん縮少して、ありたけになつた残の油こりあぶらはすでに燃え尽してしまつた。

「城門を開けて下さい」

大きな希望を含みながら恐怖の悲声、かげろうにも似ている西関門前の黎明の中に戦々兢兢として叫んだ。

二日目の日中、西門から十五里の万流湖の中に一つの土左衛門を見た人があつて大騒ぎとなり、終に地保の耳に達し、土地の者に引揚げさせると、それは五十余りの男の死体で、「中肉中脊、色白く鬚無し、すっぱだかで上衣も下袴も無い。ある人がそれは陳士成だといったが、近処の者は面倒くさがつて見にも行かなかつた。死体の引受人もないから県の役人が立会つて検屍の上、地保に渡して埋葬した。死因は至つては当然問題ではない。死人の衣服を剥ぎ取ることはいつもあることで、謀殺の疑いを引起す余地がない。そうして検屍の証明では、「生前、水に落ちて水底に藻搔いたから、十本の指甲の中には皆河底の泥が食い込んでいる」と。

(一九二二年六月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の書き換えをおこないました。

「或る↓ある 聊か↓いささか 一層↓いつそう 大方↓おおかた 凡そ↓およそ 却つて・反つて↓かえつて 曾て↓かつて （て）呉れ↓くれ 此処↓ここ 此↓この 之れ↓これ 宛ら↓さながら 而も↓しかも （て）仕舞↓しま 頗る↓すこぶる 其↓その 沢山↓たくさん 慥か↓たしか 只↓ただ 忽ち↓たちまち 就いて↓ついて 兎に角↓とにかく 中々↓なかなか 甚だ↓はなはだ 正に↓まさに 先ず↓まず 又↓また 未だ↓まだ （て）見↓み 以て↓もつて 漸く↓ようやく」

※底本にある「燈」は同底本から作られたファイルと同様に、そのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（鈴樹尚志）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2006年4月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白光 魯迅

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>